HAPPY NEWS

No.12

新聞は セレンディピティー

偶然の出合いによる気づき

HAPPY NEWSは、新聞を読んでハッピーな気持ちや新たな気づきを与えてくれた記事と、その理由を募集するキャンペーンです。日本新聞協会が2004年度からはじめ、今回で12回目になりました。この受賞作品集は、前回と同じくゲスト審査員のアートディレクター・森本千絵さんのデザインです。受賞作品やキャンペーンの詳細は、新聞PRウェブサイト「よんどく!」をご覧ください。

よんどく! http://www.yondoku.com

新聞協会は4月6日の「新聞をヨム日」にあわせ、「HAPPY NEWS 2015」を発表します。今回の応募総数は3538件。このうち大学生からは前回を上回る1299件の応募がありました。多数のご応募、ありがとうございました。

今回は、日本中を興奮させたラグビー日本代表の活躍をはじめとするスポーツ関連記事はもちろん、日常の中の小さな幸せに関するニュースにも多くのコメントが寄せられました。そのほか、写真、投稿、広告にも多数の作品がそろいました。

作品の審査は、全国の新聞・通信社による委員会が2回にわたり、行いました。その結果、HAPPY NEWS大賞1件、HAPPY NEWS賞2015 10件、大学生大賞(個人)3件、大学生大賞(グループ)1件、家族賞4件などが選ばれました。また放送作家・脚本家の小山薫堂さん、森本千絵さん、シンガーソングライターのmiwaさんが各1件のゲスト審査員賞を選びました。

大賞受賞作品は、2ページをご覧ください。応募者が記事に自らの経験を重ね、素直に共感をつづった点が評価されました。また、記事を通じて読者に幸せを届けたHAPPY NEWS PERSONに輝いたのは、朝の通勤時、視覚障害者への介助を2人でバトンタッチして続けた会社員の山口愛未さんと田上雄也さん(5ページ)です。同特別賞に、ラグビー日本代表チームが選ばれました。

受賞作品を通し、新聞が事件だけではなく、温かな気持ちになるニュースを届けていること、そして、「気づき」に満ちたメディアであることを感じてください。

HAPPY NEWS PERSON 特別賞

(c)JRFU2015, photo by H.Nagaoka

ラグビー日本代表チーム

2015年、ラグビーワールドカップ・イングランド大会。日本代表チームは優勝候補の南アフリカとの試合ですばらしい逆転劇を見せ、世界中を驚かせました。これまで、あまりラグビーになじみがなかった人々にまでも感動を与え、熱狂させたそのプレーを伝える記事に、興奮冷めやらぬコメントが数多く寄せられました。

受賞コメント

このたびはHAPPY NEWS PERSON特別賞をいただき、ありがとうございます。2015年は日本代表がラグビーワールドカップ・イングランド大会で南アフリカを破る歴史的な勝利をあげ、また7人制男女日本代表もリオ五輪出場を決めて、ラグビー界にとってハッピーな話題が続きました。今年もラグビーを通じて皆さまにハッピーをお届けできるよう頑張ります。

CONTENTS

HAPPY NEWS 大賞	2
HAPPY NEWS 賞 2015	3
HAPPY NEWS 2015 大学生大賞(個人)	8
HAPPY NEWS 2015 大学生大賞(グループ)ほか HAPPY NEWS 2016 募集要項	9
第6回いっしょに読もう! 新聞コンクール 結果発表	10
HAPPY NEWS 2015 ゲスト審査員賞 小山薫堂賞・森本千絵賞・miwa賞	12

HAPPY NEWS大賞

バスの中 泣きやまない乳児 その時

バスの車内で泣き始めた乳児をあやせず困った母親に、運転手が車内アナウンスで語りかけた言葉がネット上で話題になっている。

8月31日午後、15人ほどが乗った横浜市営の路線バスで母親の腕に抱かれた赤ちゃんがぐずり始めた。母親と友人の女性が2人であやしていたが、赤ちゃんは手足をばたつかせ泣き声は大きくなるばかり。友人は途中で下車し、母親は立ち上がりあの手この手であやすも泣きやむ気配はなかった。

10分ほど経った時、車内アナウンスが流れた。

「お母さん、大丈夫ですよ。赤ちゃんですから気になさらないでください。きっと眠いか、おなかすいているか、おむつが気持ち悪いか、暑いかといったところでしょうか」

明るい口調でミラー越しに語りかけたのは、鈴木健児さん(46)。乗車歴20年のベテラン運転手だ。

「迷惑をかけないよう何とかしたい、というお母さんの焦りをひしひしと感じた。今後バスや電車を使うのをためらうんじゃないかと心配になって」と振り返る。このやりとりがネットに投稿されるとツイッターなどで拡散され、「感動。まさにプロ」「運転手さん素晴らしい」などの投稿が相次いだ。

（永田大）

赤ちゃんですから 気になさらないでください

運転手のアナウンス ネットで拡散

話題となった運転手、鈴木健児さん

川村 玲子さん
62歳 神奈川県

バスの中で乳飲み子が泣きやまず苦労した経験は母親なら誰にもあるだろう、と思う。私もそうだった。混雑し立っているときなどパニックに陥り、心の中で「助けて！」と何度叫んだことか。

乗客が15人ほどだったというから、女性はこのバスでは座っていたのだろう。よかった。でも、迷惑をかけたくないとの気持ちは通じて運転手のアナウンスとなって…。多分みんなうなずいて聞いていてくれたと思う。私が乗客ならそこで拍手し、みなさんもつられて、拍手してくれただろう。

妊婦や幼児を抱いた母親などに席を譲らない、すれ違いに肩がぶつかっても会釈をしないなど、とかく最近の公徳心のなさにちょっと気落ちしていたところ、この記事との対面だ。留飲を下げるとともに、早速友人たちにも知らせ「こういうこともある」とハッピーな気持ちを共有したことは言うまでもない。

朝日新聞 2015年9月4日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS賞 2015

城間 友美さん

37歳 沖縄県

ある晩、見出しにひかれて読んだ記事。繰り返し読むうちに、投稿者夫妻の愛にあふれたやりとりにいつのまにか涙が出てきてしまいました。

何も知らずに「月が奇麗ですね」というご主人に、「私、死んでもいいわ」。そう答え、ご主人をおいて先に旅立った奥様。

ご主人は愛する人を失い、しばらくは何も考えられなかったことでしょう。そして、時がたってからようやく奥様の残した言葉について調べたのでしょう。

時を経て、あらためて奥様の気持ちを知り、ご主人の心はずいぶんと慰められたのではないでしょうか。奥様は最後に本当にすてきな贈り物をなさいました。そしてまた、生前の奥様に対して、ご主人も同じくすてきな贈り物をなさっていました。

この記事を読んでから私も時折、月を眺めるようになりました。そのたびに年齢を重ねてもいつまでも互いを思いやる、ご夫妻のエピソードに胸が熱くなります。

琉球新報 2015年3月15日付朝刊を読んで

月が奇麗ですね

仲間 義勝 74歳

月には月齢によっていろいろな呼び名がある。新月、三日月、十三夜、満月、宵闇、そして、二十三夜などと16種の呼び名があるらしい。夜空に架かるそれぞれの姿は、いずれも宇宙の謎と神秘に光り、本能の奥に眠る野生を穏やかに刺激する。太古からの月の美しさは今も変わらない。月を仰ぎ、月に祈る、そこから人間は神の愛を発見し、信仰を築きあげてきたのかもしれない。

ある満月の夜、窓からそれを眺めながら妻に言った。「月が奇麗ですね」

それに対し妻は過度に喜び笑顔で答えた。「私、死んでもいいわ」

それから3カ月後、妻はその言葉通りに旅立った。

最近になって「I love you」を英語教師だった夏目漱石は月が奇麗ですねと訳し、同時代の作家二葉亭四迷は、女から男への「I love you」を「私、死んでもいいわ」と訳していたことが分かった。

読書好きで英語教師だった妻はそのことを知っていたのだ。あの時、お互いは「I love you」と言い合ったことになる。

(那覇市)

足取りは軽く。月明かりの中、棚田を行く(仁淀川町長者乙)

こうち 歳晩 点描 3

ほんとにおったがや

—こんばんは、何をしているんですか。

「下見よ、下見」

—あなた誰ですか。

「見りゃ分かるろう。袋がや」と。

この地区では約30年前から12月になると赤い服の人が現れるようになった。高齢化もあったのだろう、いつしか姿を消した。でもあの中身? 子どもの夢、とだけ言うちょこうか」

吾川郡仁淀川町の長者地区。クリスマスイブの夜に赤い服を着た人が子どもの家を回り、プレゼントを置いていく。子どもは喜び、首をひねる。「お父さんじゃない、ほんとにおったの喜びを子どもたちに味わってほしいと思う人が、また現れた。6年前、赤い服の人は少し若くなって帰ってきた。

「子どもがびっくりしてはしゃぐ姿はええぞう。小さい子は泣くけどね」

—足元に気を付けて頑張ってください。

「おう、じゃあんたにも言うちょこう」

メリークリスマス。

写真と文・森本敦士

棚橋 すみえさん

66歳 高知県

思えば幼いころ、クリスマスが一日一日と近づいてくると、どんなに胸を弾ませていただろうか…。何せ、サンタさんは本当にいるんだと信じていたので、イブの夜はまず、枕元に靴下を置いて準備万端。でもその後、母から「はよう寝んとサンタさん来んぞね」と言われ、日ごろは宵っ張りの私も早々と布団に入り、とにかく目だけはつぶって寝たふりをしていたなあ…。だから、母がそっと枕元に贈り物を置くのを垣間見たときは少しがっかりしたけれど、半面、「そうやったがや」と妙に納得していたなあ…。でも遠い日、サンタを信じ、祈りを込めていたクリスマスも大きくなるにつれ、夢すら見られなくなっていた。

でも今回、このサンタさんの記事を目にしたとき、働きづめの日々で贈り物を用意する間などない母に、私へのプレゼントを準備してくれたのは、やはり本物のサンタだったのだと思えた…。

胸いっぱいの幸せな気持ちにしてくれた紙面に感謝です！ほんとにおったサンタにも。

高知新聞 2015年12月24日付夕刊を読んで

病の花嫁 待ち続けた夫

突然の発症、回復し8年越し挙式

▲意識不明で入院中だった中原麻衣さん（中央）の誕生日を祝う尚志さん（中央上）と、麻衣さんの両親＝2007年8月、岡山大病院
▼結婚式で祝福を受ける麻衣さんと尚志さん＝14年12月、岡山市南区、いずれも麻衣さん提供

突然の病気で数年間意識がはっきりしない状態が続いていた岡山県の女性が、徐々に回復し、昨年12月に結婚した。相手は倒れる前に婚約し、家族同然に闘病を支えてくれた男性。8年越しの結婚式だった。

昨年12月、岡山市内の結婚式場、ウェディングドレス姿の中原麻衣さん(32)は車いすから立ち上がり、両親に支えられてゆっくりバージンロードを歩いた。その先では、新郎の中原尚志さん(34)が見守った。

2人が婚約したのは、結婚式の8年前の2006年7月。1年間の交際を経て、尚志さんがプロポーズ。翌年3月、この式場で挙式の予定だった。

ところが、式まで3カ月余の06年12月末、麻衣さんに異変が起きた。直近の記憶がなくなり、真夜中に奇声を上げるようになった。脳外科を受診したが、原因は不明。精神科病院に入院中、一時は心肺停止にもなった。岡山大病院に転院後も昏睡状態が続き、けいれんしたり暴れたりした。

数カ月後、発症例が極めて少ない「抗NMDA受容体脳炎」の疑いが強まった。細菌やウイルスから身体を守るはずの免疫系が自分の脳を攻撃することで、幻覚を見たり呼吸が弱くなったりした後、無反応の状態などが続く。発症率は100万人に0・33人とされる。

「自分だけ普通の生活戻れない」

適切な治療が始まると、呼びかけに反応できるようになるなど、少しずつ快方に向かった。08年から3年ほどかけて、自分の名前を漢字で書き、感情を出せるようになった。

11年春に退院。自宅で過ごすうち、家族は認識できるようになったが、痙攣や自宅に頻繁に来て話しかけてくれる尚志さんのことは思い出せなかった。「何でいつもそばにおるん？」と疑問に思っていた。

きっかけは、背の手帳だった。07年3月11日に「結婚式」と書かれていた。「私、結婚しとったっけ？」。手帳には、2人のデートの予定やツーショットの写真シール。次第に記憶がよみがえり、交際相手だったとわかった。

2人は14年6月、挙式するはずだった式場に連絡した。式場側も2人の挙式をバックアップ。担当したウエディングプランナーの久保田聖さん(28)は「信じられなかった。『復活や！』って喜びました」と振り返る。顧客ファイルを整理していて2人のことを知り、気になっていたという。

式場の運営会社は、2人の許可を得て結婚式の様子やいきさつを動画にまとめ、「8年越しの結婚式」として動画サイト「YouTube」に投稿。再生は64万回を超えている。

麻衣さんは「私が尚志の立場だったら、果たして8年間待てただろうかと思う。感謝している。これから幸せな家庭を一緒につくっていきたい」と話す。

尚志さんは麻衣さんが寝たきり状態だったとき、ほかの女性を探すよう麻衣さんの家族に言われたが、あきらめなかった。「自分だけ普通の生活に戻るなんて考えられなかった。少しずつだけど日に日に良くなる姿を見ていたから、8年を長いと思ったことはない」

麻衣さんは現在妊娠中で、近く出産予定だ。2人の物語は「8年越しの花嫁 キミの目が覚めたなら」という本になり、7月に主婦の友社から出版される。

（関根和弘）

小嶋 千晴さん
57歳 高知県

「読んだ？」「うん、読んだ」「すごいね」「うん」。

夫は一面から、私はテレビ欄から新聞を読むのが習慣で、それぞれに好きなジャンルがある。そんな私たちがその日の夕食時に交わした最初の言葉。同じ記事のことだとすぐに分かった。本人が、婚約者が、両者の家族が、それぞれに悩み、お互いを思いやった結果が最高の形になって、本当に良かった。心から祝福したい。

と同時に、自分が同じ立場だったら尚志さんのように待つことができるだろうか？　昨年、銀婚式を迎えた私たちに「本当の愛とは何か」など、そうしたこともあらためて考えさせる記事だった。「ドラマチック」という一言で語るのは簡単だが、当事者にとっての８年間は試練の連続だったに違いない。

尚志さん、麻衣さんの笑顔がいつまでも続くことを願ってやまない。

朝日新聞　2015年6月4日付朝刊を読んで

「秋山違い」から12年…

秋山仁さん

秋山幸二さん

「仁」さん講演 実現へ

福岡県築上町は7日、数学者で東京理科大理数教育研究センター長の秋山仁さん(68)を招き、9月27日に講演会を開くと発表した。町では12年前にも仁さんの講演会を企画したが、誤って同姓のプロ野球福岡ソフトバンクホークス前監督・秋山幸二さん(53)を招くハプニングがあった。「あの時のおわびをしたい」という町の誘いを仁さんは快諾し、「とても楽しい思い出。間違えてくださった担当者に感謝している」と話している。

2003年11月、椎田中学校が仁さんの講演会を企画したが、関係者の手違いで幸二さんに依頼。訪れた幸二さんは快く代役を引き受け、演題の「デッカイ夢さえあればなんとかなるさ」に合わせて中学生に語りかけた。町は今年4月5日、改めて幸二さんのトークショーを開き、当時の思い出を語ってもらった。

今回は町の合併10周年に合わせ、当時、実現しなかった仁さんの講演を正式に依頼した。仁さんは読売新聞の取材に、「迷惑どころか、貴重な体験をさせていただいた」と述懐。当時、中学生たちが大喜びしたという記事を読み、「私では到底そうはいかなかったでしょう。幸二さんの『デッカイ生きざま』を私も学ばなければいけない」と振り返った。9月の講演では12年前の出来事を語る予定という。

幸二さん 再会の講演

「秋山」違い「代打」から12年

プロ野球福岡ソフトバンクホークス前監督の秋山幸二さん(52)が5日、福岡県築上町で開かれたトークショーに登場した。秋山さんが同町で講演するのは、2003年に同姓の数学者・秋山仁さん(68)と間違えられ、「代打」で講師を務めたハプニング以来。幸二さんは全国的な話題となった当時を「いい思い出です」と振り返った。

（柳原正和）

町内の椎田中が03年11月、仁さんの講演会を企画したが、関係者の手違いで幸二さんに依頼。当日、幸二さんが訪れてミスと分かったが、自ら代役を申し出た。演題の「デッカイ夢さえあればなんとかなるさ」に合わせて約1時間半、中学生に語りかけた。幸二さんの対応は「器が大きい」などと話題となった。

今回のトークショーは、町の合併10周年を記念して企画された。約400人の聴衆を前に、幸二さんは当時について「受付の方に（一般客のようで）靴の整理券を渡され、『何かおかしいな』とは感じていた」と切り出した。「しばらく待っても呼ばれず、会場で『どこへ行けばいいですか』と尋ねたら、『今日は数学者の秋山仁さんの講演です』と言われ、まさかと驚いた」とにこやかに話すと、会場は笑い声で包まれた。

中学2年生の時に講演を聞いた女性から花束を受け取る秋山幸二さん

福岡・築上 「お互い成長、今日も楽しかった」

司会者は「怒って帰ろうとは思わなかったのですか」と質問。幸二さんは「校長先生が笑顔で経緯を説明してくださったので、『僕でよければ』と伝えました。いい思い出です」と語ると、大きな拍手が沸いた。昨年、ホークスで日本一になった経緯や、選手への指導法についても語った。

椎田中2年の時に講演を聞いた病院職員の竹森優希さん(24)ら2人が幸二さんに花束を贈呈。竹森さんは「当時は驚きましたが、友達もみんな感激していた」と振り返った。幸二さんは、あの頃は選手を引退して間もない時期だったが、この12年間で指導者としての経験を積み、生徒さんも成長して再び会えた。12年前も今日も、とても楽しかった」と満足そうに話していた。

永露 江未子さん
44歳 福岡県

12年前の記事を瞬時に思い出した。ホークスファンの私にとって、秋山さんと言えば秋山幸二さん。仁さんと間違って、幸二さんにオファーしてしまうのも無理はない、と当時思ったものだ。そして間違われた幸二さんが中学生に講演し、大変盛り上がったと報道されていたのをとてもよく覚えている。

それから12年の歳月を経て、幸二さんが再び成長した子たちの前で講演されたという記事を読んで、思わず笑みがこぼれた。そしてこの話には続きがあり、当時講演を間違えられてしまった仁さんも9月に講演会をされるという。

たくさんの方が相手を思いやり、ミスをミスにせずに助け合ったからこそ、生まれたエピソードだ。ピンチをチャンスにした温かいエピソードに、ほっこり温かい気持ちになった。

読売新聞　2015年4月6日付朝刊、5月8日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS賞 2015

朝の地下鉄 つなぐ善意

田上雄也さん（左から2人目）の介助で車両に乗り込む武藤靖子さん＝名古屋市中区の地下鉄鶴舞線伏見駅で

火曜日の朝七時五十八分。名古屋市中村区の武藤靖子さん(七五)は毎週、この時間を楽しみにしている。不自由な目の治療に向かう地下鉄の乗り換えで、きまって車内へ案内してくれる人がいるからだ。微妙に変わるドアの位置や、通勤ラッシュの列に合わせて歩きだすタイミング…。戸惑う武藤さんに手を差し伸べる役はこの春、先輩から後輩へと引き継がれた。（社会部・斎藤雄介）

山口愛未さん

「おはようございます」二十三日朝、地下鉄伏見駅。東山線から鶴舞線に乗り換えようと、白杖を頼りに壁際をゆっくり歩く武藤さんに、中京銀行浄心支店（同市西区）へ通勤途中の田上雄也さん(二五)があいさつした。顔いっぱいに笑みを浮かべる武藤さんに腕を貸し、列の後ろについて車内へ。武藤さんが愛知県岩倉市の治療院へ通う際に続く習慣だ。田上さんは同じ銀行の先輩から、この役割を託された。

浄心支店勤務だった山口愛未さん(二五)。昨年冬、同じ駅のホームで、降車する人波にさらわれそうになる武藤さんを見て声をかけた。周囲は通勤や通学を急ぐ人たち。気になって、毎週待つようになった。

伏見駅 視覚障害者の介助 後輩へ継ぐ

三月、山口さんは市内の別の支店へ転勤に。「きょうで最後です」。別れ際にそう告げられた武藤さんは、「名前も勤め先も、聞いておけばよかった。なんだか、聞くのがはばかられちゃって…」。

武藤さんは網膜の難病で、五年ほど前からほとんど目が見えなくなった。左右に振りながら進路を探る白杖がぶつかり、通行人に怒鳴られたこともある。四年前には、自宅近くの駅で柵のないホームから落ち、レールで背中を強打した。

「つらい話が多い中で、助けてもらえるのがありがたくて、ありがたくて」

そんな思いを感じていた山口さんは、こっそり後輩に〝引き継ぎ〟をしていた。選ばれたのが、入行二年目の田上さん。「体の不自由な人を手助けしたくても、相手が迷惑だったら…と思って、声をかけられなかった。むしろありがたいです」と話す。

朝、同乗するのは六、七分。武藤さんが「出身は？」「お仕事は？」と矢継ぎ早に質問するのは、何も聞けずに山口さんと別れたことを悔いているからだ。会話の花が咲く車内に、壁はもうない。

片岡 貴美恵さん

69歳 北海道

うわ～、この女性って、なんてウイットに富んで、チャーミングな人なんだろ～と思わず膝を打ちました。こんな女性こそが、私の「憧れの生き方」なのです。

ハートがチャレンジ精神にあふれて、若々しく、そして人に慈愛を注げるなんて、素晴らしいことです。多くの日本人女性は私も含めて、きっとためらってしまって行動に移せないでしょう。

こんな「読者の声」って、久々のヒットです。こんな年齢を重ねた人がうんと増えると、老後も捨てたもんじゃないと思います。もっと「世の中を明るくする、パワフルな老人になろう」と心に誓った日でした。

北海道新聞 2015年11月3日付朝刊を読んで

投げキッス 市電に笑顔

主婦 清田 延子 82（函館市）

街に買い物に出かける時、よく市電に乗っていく。車内の雰囲気が楽しいし、市からいただく助成券もうれしい。

ある日、以前から仲良しの「イケメン」の彼と会った。つもる話も時間が足りない。目的地で降りる彼に手を振った後、ふざけて投げキッスをふんわり飛ばした。

ユーモアが分かる彼は、笑顔で投げキッスを両手で受け止め、胸のポケットに入れるしぐさをしてバイバイした。

その時、同乗していた数人の外国の方が、この様子をにこにこ笑いながら見ていた。次の電停で降りる時、私に笑顔を向けて小さく手を挙げた。

それに応えて投げキッスを返した。すると、思いがけず皆さんが両手で受け止めてポケットに入れる動作をしたのだった。車内にいた周りの人たちは破顔、大笑いの渦となった。

美しい絵が車体に描かれ、楽しい時間を乗せた市電は函館の街を走り続ける。いろいろな物語を知っているのだろう。

山田 安重さん

75歳 岐阜県

世間では「近ごろの若い者は」と言うが、それは一部であるということを教えられた。高齢の女性にとっては何とも頼もしく、そして希望につながったと思う。このことだけでなく、後任を決めてまでも気遣う山口さんの優しさに拍手を送ります。

きっと家庭などでそのようにしつけられ、土壌があったのだと思う。近年、ホームの可動式柵など障害者へのハード面のバリアフリーは進んでいるが、十分とはいえない。それを補うのは、健常者によるソフト面での声かけや、手をさしのべる介助であると思う。人は誰でも優しさを持っており、それを障害者に対して勇気を出して、手や足、また、目や耳となることの大切さを学ばせていただいた。

山口さんの行動は新聞の一面を飾るにふさわしいホットニュースで、読者に小さなことからでも障害者に対し目を向けるキッカケを芽生えさせたと思う。いずれにしても、行政任せではなく、障害者が安心して歩ける街をつくりたいものだと思う。

中日新聞 2015年6月23日付夕刊を読んで

HAPPY NEWS PERSON

山口愛未さんのコメント

このたびはこのような素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。声をかけることは勇気がいることですが、その勇気を必要とされている方もいらっしゃいます。今回の記事を多くの方に読んでいただいたことがうれしいですし、勇気を必要とされている方に、これからも声をかけさせていただきたいと思います。

田上雄也さんのコメント

このたびはこのような素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。先輩から「お願いしたいことがあって」と引き受けはや1年、「助けを必要とされている方に手を差し伸べる」という当たり前のことをこれからも続けていきたいと思います。

森　由起子さん
61歳　岐阜県

3月の声を聞き、卒業式シーズンに思いをはせるとともに、あの11日が近づいて来たなと複雑な思いに心をとどめている時に、この記事に出合いました。

1人のために、学校全体で送り出すことを、認め合い、支え合い、心の手をつないでやり遂げた。こういう卒業式もあるということを、記事を通して知ることができて、読んでいて温かな涙がこぼれました。そして、写真に向かって心から「卒業おめでとう」。

恵瑠さん、あなたは震災でたくさんの大切な宝物を失ったけれど、「1人だけの卒業式」という、みんなの思いの詰まった心の財産ができましたね。私自身、毎日平凡に暮らしている幸福と、日々大切に生きることの大事さを教えてもらったようです。

図書館で読んだ作文集にあった、「3月10日まではいい日だったね」という少女の作文の1行が深く心に残ります。これからの人生が明るく、再び、「いい日」が訪れ、長く長く続きますように。

中日新聞　2015年3月3日付朝刊を読んで

被災地に帰る友へ

もう4年　東日本大震災

一人だけの卒業式　皆で祝う

東日本大震災で仕事を失い、愛知県設楽町田口に移り住んだ扇山幸徳さん(四)の一家四人は今春、故郷の宮城県気仙沼市に帰る。長女の恵瑠さん(一四)は設楽中学校の三年生。五日が卒業式だが、気仙沼の高校受験日と重なるため出席できない。「皆で門出を祝いたい」。設楽中は二日、恵瑠さんのために、学校を挙げて卒業式を催した。（設楽通信部・鈴木泰彦）

拍手に送られ、卒業証書を手に式場を出る扇山恵瑠さん＝2日、愛知県設楽町の設楽中で

勤務先の水産加工会社を津波で失った幸徳さん。知人に、設楽町内にある愛知県淡水養殖漁協を紹介され、二〇一一年八月、一家で町営住宅に移住した。

妻の幸代さん(四)も町の学校給食共同調理場で働いた。当初は定年まで設楽町にいるつもりだったが、今も仮設住宅で暮らす両親が気にかかり、帰郷を決断したという。

恵瑠さん一人のための卒業式には、妹の瑚都さん(一)＝一年＝を含む全校生徒九十九人が参加。町の教育委員長やPTA会長、保護者有志約二十人も加わった。「慣れない土地で苦労した彼女を、学校全体できちんと送ってあげたかった」と加藤静冬校長(六〇)は話す。

拍手に迎えられて入場した恵瑠さんに、加藤校長は卒業証書を手渡す。「つらくても苦しくても、あなたは笑顔を絶やさず頑張ってきた。気仙沼はまだ復興途上です。帰郷したら、ふるさとを取り戻す若い力になってください。どんなに離れていても、私たちはあなたに声援を送り続けます」と激励した。

答辞を述べる恵瑠さんは時々声を詰まらせながら、「海の町から山の町に。最初のころはなじめず、気仙沼に帰りたいと思ったことも。でも、すばらしい仲間や先生のおかげで引っ込み思案を克服し、楽しい三年間を過ごすことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。いつまでも忘れません」と語った。

式を終えた幸徳さんは「校長室で卒業証書を贈られるのかと思ったら、本格的な式で驚きました。不覚にも涙が出ました」。幸代さんは「校長先生は冬休みに気仙沼を訪ね、娘二人の志望校や転校先にあいさつして回られた。本当にありがたいです」と目頭を押さえた。

◇

東日本大震災は十一日で四年を迎える。住まいや道路の復旧は徐々に進み、一歩ずつ前へと向かう人がいる。一方で、いまだに生活再建のメドが立たない人もいる。被災者にとって、「もう四年」なのか、「まだ四年」なのか。被災地の今を見つめる。

設楽中学校

絶望の中、支えてくれた友を祝福

仲間の卒業を祝福する立山颯大君（中央）＝志布志市の志布志高校

事故で障害、転学の立山君

復学を待つ同級生が作った旗

志布志市の志布志高校で2日、卒業式があり、保護者席最後列に2年生で転学した立山颯大君(18)の車いす姿があった。競泳の全国中学総体を制した期待のスイマーは2年前の交通事故で胸から下が不随に。絶望する立山君を同級生は支え続け、立山君もリハビリ現場から同級生にエールを送り続けた。卒業生答辞では「みんなの気持ちを一つにしてくれた」と立山君への感謝の言葉も飛び出した。

志布志高卒業式に出席

立山君は2013年2月、水泳の練習帰りに自動車事故に遭った。頸椎骨折。7カ月間の入院後、自宅でのリハビリ生活が今も続く。2年に進級したものの一度も出席できず、年度末に転学した。

それでも級友は待ち続けた。「そーだいクラス　君がいて僕等がいる」と書き込んだ学年カラーの黄色い旗は転学後も文化祭、体育祭など学年がまとまる機会にいつも掲げられた。輪番で授業の様子やメッセージを日誌につづり、担任の山之口輝美教諭(27)が定期的に届けた。「帰った時に寂しい思いをさせたくない」と仲良しの女の子たちは、素人なのに水泳部に入った。

復学はかなわなかったが、学校行事には車いすで顔を出し、センター試験当日も手紙を送って生徒を勇気づけた。「いつも笑顔で誰にでも優しく接してくれた頼もしいリーダー。つらい思いをしていることは全員分かっていたので励ましたけど、逆に支えてもらった」と親友の鈴木星良君(18)は振り返る。

卒業式後のロングホームルーム。立山君は教室で仲間に感謝の言葉を口にした。

「正直、死にたいと思ったこともあった。みんなの温かいメッセージが、自分が能天気でポジティブだったことを思い出させてくれた」

（小田洋太郎）

森永　國昭さん
72歳　鹿児島県

彼が水泳で素晴らしい記録を出し、水泳界で活躍していることは知っていたが、最近ニュースに出ないのでどうしたのだろうと思っていた。彼が交通事故に遭っていたということ、さらに転学していたにもかかわらず、友人がいる高校の卒業式に参列していたニュースに心を打たれた。

輝かしい将来を夢見ていた少年が、突然の事故で胸から下が不随になるという絶望の中から立ち上がり、友人にエールを送り続けていたことは驚くべき精神力の現れである。省みて、リタイア後に少々のことでつい不満を口に出してしまう自分と比べて、人間としての器の違いに気づかされるのである。ここに至るまでのご家族はじめ、学校当局の支援も並々ならぬものがあったと推測できるが、この記事に久しぶりに励まされた。写真から、本人や友人たちのはち切れんばかりの明るさがうかがわれる。この若者たちに心からの拍手を送りたい。

南日本新聞　2015年3月6日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS賞 2015

七五三(しめ)家10人きょうだい

合わせて753歳 そろって健康

七五三家の10人きょうだい（敬称略）

長女	中野　葉	(87)
次女	藤原　茜	(84)
三女	沖田　菖	(82)
四女	松岡　萌	(79)
長男	七五三　泰	(77)
五女	玉井　縁	(74)
六女	藤田　亮香	(71)
七女	武田佐由利	(69)
次男	七五三　学	(67)
三男	七五三　琢	(63)

七五三（しめ）という縁起のいい名字の家に生まれた10人きょうだいの年齢がこのほど、合計して753歳になった。大洲市河辺町三嶋で育ったきょうだいで、上は87歳、下は63歳。全員が元気だからこそ達成できる一家ならではの節目を、親族挙げてお祝いした。

地元大洲でお祝い会

きょうだいは女性7人、男性3人。地元に2人が残り、大洲市中心部、松山市、砥部町、大阪府吹田市でそれぞれ暮らしている。父は、旧河辺村の学校長で和歌を残したことで知られる満（みちる）さん（1904～59年）。母は2002年に94歳でしくなった百々栄さん。

各地に散らばる10人だが、年1回は集まり会や旅行を楽しむ間柄。毎年仲良く合計年齢を10歳ずつ増やし続け、10年に計700歳を達成した。

その後、名字にちなむ753歳が目標に浮上し「計算したら2015年だ」「その時は集まろう」と約束。全員無事に年月を過ごすことができ、末子の三男琢（みがく）さん（63）＝松山市＝が7月に誕生日を迎え、計753歳となった。

お祝いは8月23日、父の歌碑が残る大洲市河辺町三嶋の「河辺ふるさとの宿」（旧大伍小学校）で開催した。孫やひ孫を含む一族122人のうち48人が集合。10人の名前を全部入れて作った漢詩が披露され、題は「七五三（なごみ）の歳祝」。戦前から戦後にわたる10人の幼少期の記憶を寄せ合った記念文集も配布され、大いに盛り上がったという。

地元に住む次女の藤原茜さん（84）は「戦後は食糧難でしたが、きょうだいが多い生活は、かくれんぼにしても鬼ごっこにしても楽しかった」と回想。五女玉井縁（ゆかり）さん（74）＝砥部町＝と一緒に親戚一同の写真を眺め、「10人に元気な体を残してくれた両親に感謝です」とほほ笑んだ。（中井有人）

↑今年で計753歳になった七五三家の10人きょうだい＝2010年撮影（七五三家さん提供）　↓きょうだいの写真を前にほほ笑む次女藤原茜さん（左）と五女玉井縁さん＝26日午後、大洲市河辺町三嶋

安部　幸恵さん
49歳　愛媛県

七五三で「しめ」と読む。そんな縁起の良い名字があるのだと、この日の朝刊で知りました。記事を読んで、まためでたい!!　10人きょうだいが全員お元気で、毎年集まるなんて仲が良いですねぇ。だからこんなスゴいことができるのでしょう。2015年、10人の年齢の合計で、名字にちなんだ753歳を達成!!

皆さんのお名前も載っていて、なかには「縁」というお名前も。そろってお元気なのは、良いご縁にも恵まれているから。だって孫、ひ孫を含んで121人ですから。3けたですから!!

「10人に元気な体を残してくれた両親に感謝です」と、茜さん。ご両親のお名前は、満さんと百々栄さん。お二人の名前のように、これからも皆さんお元気で、毎年笑顔で仲良く集まってください!!

愛媛新聞　2015年8月31日付朝刊を読んで

水口　文子さん
52歳　静岡県

モノを隠してしまう妻と、それを探し出す夫の生活は、夫の愛情とユーモアが支えている。妻の行動を「隠しっこ」という遊びととらえ、オニ役を楽しんだり、「隠す」という言葉を嫌う妻のために言葉を言い換えたりして、妻に寄り添う姿に心を動かされた。

自分が相手に歩調を合わせることで、お互いを大切にし、心穏やかに生きていく知恵。「連れ添う」というのは、こういうことを指すのではないだろうか。全てに当てはまるわけではないが、困難の中には受けとめ方、考え方によって、和やかに対応できることがあるのが分かる。その前提が愛情と理解であることも。

私もいつか、オニ役を長くやる時がくるかもしれない。つらくて役を降りたくなった時のお守りとして、この記事はずっと手元に置いておこう。

毎日新聞　2015年12月12日付朝刊を読んで

隠しっこ

男の気持ち　2015.12.12

わが家では今、「隠しっこ」という遊びがはやっております。これはモノを隠す遊びで、最初に見つけられた人が次のオニとなります。

でも、わが家の場合は隠すのはいつもおばあちゃん（妻）、捜すのはおじいちゃん（私）と決まっております。

童女に戻ってしまったおばあちゃんは、「隠す」という言葉をたいそう嫌っております。

「隠してなんかいないよ！」と言います。おばあちゃんはものを整理整頓しているつもりなのでしょうね。以後、「整頓」と言うようにしました。

オニ（私）が疲れてうたた寝していると、必ずものを"整頓"してくれます。自分も何かをしないと悪い、と思っているのでしょうね。

隠す範囲が狭いので、オニとしては見つけるのは比較的、簡単です。見つけられないときは、2、3日待つことにします。思いがけないところで見つかります。

先日は、オニのめがねを整頓してくれましたが、この時はおばあちゃんに降参しました。よく見えない目で必死に捜して、なんとか見つけました。めがねは鼻にかける中央部分で曲げてたたまれていました。オニはめがねを買い直しました。

最近は「隠しっこ」を楽しんでいます。おばあちゃんがものを当たり前のように隠すようになったら、オニはつまらなくなりますから。

でも迷います。本当は当たり前の所に隠すようになってほしい、と願っています。

武井　春樹　無職・82歳

HAPPY NEWS 大学生大賞（個人）

3件

余録

少女は入学した高校で激しいいじめに遭う。弁当や教科書が捨てられた。ゴミ箱の中を必死に捜す自分を同級生が笑って見ている。先生に相談しても取り合ってくれない。学校の最寄り駅の待合室で睡眠薬を一気に飲んだ▲床に倒れた。見ず知らずのおばちゃんが駆け寄り、頭を膝に乗せてなでられた。救急車に運ばれる時、黒糖のあめを握らされた。「いつもこの時間にここにおるねん。しんどい時には甘いもんや、しんどなったらおばちゃんとこおいで。あめちゃん、なあんぼでもあげるから」▲NPO法人再チャレンジ東京が募集した「全国いじめ・自殺撲滅作文コンクール」の最優秀作品。最近出版された「いじめストップ読本」に収められている。大阪市在住の女性(25)の体験だ▲退院して駅の待合室に行った。「よう元気になったなあ」。抱きしめられ、一緒に泣いてくれた。勇気を振り絞って校長室のドアを開ける。クラスで起きたことを打ち明けるためだ。言葉に詰まり、涙が出そうになった。ポケットにしのばせたあめちゃんを握りしめた。不思議と気持ちが落ち着いた▲少女は大人になり、中高年向けのカルチャースクールで働いている。「困った時はお互い様なんや」。おばちゃんの言葉を思い出す。「あの時の恩返しをしているつもり。私も誰かの話を聞いて、誰かに寄り添う」。いじめの事件が繰り返される。そのたびに今の大人たちのことを考える▲元気になった少女がその後、いつもの時間に駅へ行っても、なぜか会えなかった。彼女は思う。あの人は天使だったのでは。あめちゃんを持った天使。日本中にいてくれたら。

2015・9・1

瓜生田　菜摘さん

19歳　和歌山県

「あめちゃんを持った天使」

当時、高校で激しいいじめを受けていた一人の少女に、舞い降りた救世主。誰しもどうしても立ち直れないとき、もう駄目だと感じるとき、何気ない言葉で傷つくことがある。そして傷つかない人はいないと分かっていても、自分自身がその立場になると周りの世界のものすべてが敵に見えることだってある。

だが彼女とおばちゃんとの少しのやり取りで救われることを知ったとき、私は、希望が確かにあるのだと確信した。実際に「悩んでるのかな？」と感じても、「ほっといて」と冷たい口調で言われるとくじけてしまうかもしれない。しかしそれは承知の上！なぜなら悩んでいると、ほとんどの人はそうなるからだ。もちろん私も。だからそんな時こそ私の出番だ。それはズケズケと相手の領域に入っていくことではない。安心できる存在としてただ寄り添うこと。ほら、あの天使も言ってた「困ったときはお互い様なんや」。誰でも天使になれるのだ。

毎日新聞　2015年9月1日付朝刊を読んで

あなた　もう一人の

嘘の構図

■■5

血縁なくても家族「愛情もらい幸せ」

里親を受け入れた日

小学生のころ、授業参観が嫌いだった。「なんでおばあちゃんしか来えへんの？」。教室の後ろを振り返った友達が不思議そうに聞いてくる。「お母さんは早くに死んだから。私、おばあちゃん子やねん」。それだけ答えて話を打ち切った。思わずついた「嘘」に胸が痛む。家では「お母さん」と呼んでいるのに。教室の隅で、優しくほほ笑んでいたその人は、大好きな里親だった。

大阪市に住む30代の森田由紀子＝仮名＝が児童養護施設から里親に引き取られたのは、5歳のとき。生まれてすぐ経済的な理由から乳児院に預けられ、施設で育った。里親夫婦は50代。実子が成人したため、里親になろうと思ったという。端から見れば祖父母だったが、由紀子は「お母さん、お父さん」と慕った。

「優しくて自慢の両親。でも…」。由紀子の誕生日に「お母さん」は小学校の友達を招きパーティーを開いてくれた。すごくうれしかったけれど、授業のときのことが頭をよぎった。

《学校では「祖母」ということになっている。「お母さん」と口に出せば、友達だって変に思う。でも、「おばあちゃん」と呼べば「お母さん」を傷つける》

結局その日、話しかけるときは「なあなあ」と呼びかけた。

「嘘」の理由は、一つではなかった。小学生では里子を友達に説明しても理解してもらえない。話したとしても、『かわいそうな子』と哀れみの目で見られて傷つきそうだった。そもそも、実の親が他人に預けたという境遇を知られること自体、嫌だった」

複雑な感情が絡み合い、嘘へと収斂していった。

そんな葛藤は「お母さん」も感じ取っていた。由紀子が友達に、自分のことを「おばあちゃん」と呼んでいたのも知っていた。

今も由紀子と同居する里親の女性(87)は「友達との話が聞こえてきて。すごく悲しかった。でも私が『お母さんよ』と言えばこの子が傷つく。私も嘘を突き通した」と振り返る。

昔を懐かしむように話す女性。隣には、「そうだったんだよね」と苦笑いする由紀子の姿があった。

「血のつながりがなくても、家族になれた」と話す由紀子（右）と里親の女性＝大阪市（南雲都撮影）

「血のつながりがなくても家族になれた」と話す由紀子（右）と里親の女性＝大阪市（南雲都撮影）

厚生労働省によると、里子の数は平成25年度末で5629人。この15年間で2・5倍以上に増えた。子供の保護政策が「施設から里親へ」と進められているためだが、根本的には児童虐待の増加、シングルマザーの背後にある貧困の拡大がある。里親制度は子供に新しい「家庭」を与えるが、幼い子供が生い立ちを受け入れ、「自分」を確立するまでの道のりは長い。

里親制度の充実を図る公益社団法人「家庭養護促進協会」理事、岩崎美枝子は「他人にどう説明するか、里子たちはいくつもの場面で思い悩む。本当のことを説明しないのも、子供なりの解決策。事実を受け入れる日がくるまで、大人は見守ることが大切」という。

由紀子には子供が計5人いる。実子は3人。2人は里子。「恩返しがしたい」と里親になった。

里子の1人は、10代の陽菜＝仮名。シングルマザーの実母との困窮した生活に耐えきれず、家出をし、保護されていた子だった。

陽菜は、家では由紀子のことを「由紀さん」と呼ぶが、学校の友達には「お母さん」と説明している。自分のときとは正反対だ。

人をいたわり思いやる「嘘」もある。理由を確かめたわけではないが、由紀子には陽菜の気持ちが痛いほど分かる。だからこそ、その嘘に寄り添ってあげようと思う。あのとき、自分の嘘を受け止めてくれた「お母さん」のように―。

家に遊びにきた陽菜の友達が、由紀子の実子を見て「弟？」と尋ねた。少し不安そうな顔をした陽菜にほほ笑みかけ、由紀子はこう答えた。

「うん、そうだよ」

＝敬称略

（田中佐和）

「嘘の構図」の部おわり

横森　朋美さん

21歳　神奈川県

「うそつきは泥棒のはじまり」ということわざがある。

多くの人々は子どものころ、親や学校の先生から、うそはついてはいけないと教わっただろう。しかし、私たちは大人になるにつれて、人を幸せにするうそもあると気がつく。相手のことを大切に思いついたうそは、真実よりあたたかく愛情に満ちあふれているのかもしれない、とこの記事を読んであらためて感じた。

産経新聞　2015年4月6日付朝刊を読んで

回答　綾戸　智恵さん

Q　クラスメートに腹が立つ

同じクラスの男子の言動に悩んでいます。その子は野球部員で、お調子者。クラスを仕切っています。私の隣に他の男子が来ると「嫌な顔すんなよー」とか、「隣に好きな子立っとおぞ」とか、わざと私に聞こえるように言うのです。私は友達も多いですし、他の女子たちと同じようにしているつもりなのに、どうして私だけそんなふざけた態度を取られなくてはいけないのでしょう。

その男子は気分に左右されすぎているように見えます。「お前は子供か」と言いたくなりますが、相手にしても仕方ないので無視しています。仲良く楽しくおしゃべりしたい気持ちもありますが、今は何だかとっても腹が立ちます。（兵庫県　17歳・女子高校生）

心に耳を傾けて

A　ドブゥワァー!! 45年前の自分を思い出したわ。「あれから40年」のきみまろ節を超えるこの感覚。でも、この質問にはほんまに大切なことが書かれているんやで。相談してくれた女子は男子に対して「お前は子供か。腹が立つ」と書いていたけど、それは男子が既に貴方の心を騒がし始めよった証拠や。飛び級のない恋心が始動したということ！エェ～と言いたいやろうけどね。

男子は自分の存在を必死に伝えてるんや。女子はこの時期、男子よりオトナでオマセやから、こいつのことは変な奴にしか見えへん。今度何か言いよったら、まぼたき何回かして微笑んで見つめてみ。男子固まると思う。10代の恋は大事なココロの成長の一環とちゃうかなぁ。オトナになるっていうのは体の変化だけやなくて、なんか胸の辺りがモヤモヤ、ザワザワ、チクチクすることなんや。たわいもない悩みちゃうで。

恋も友情も、学校での勉強も、成人してからのお仕事も。そして縁あっての結婚、出産、そして必ず来る死にあっても、常に自分の心を感じ取りながら経験してください。私が歌う時、音符や歌詞、楽譜は必要だけど、一番大切にしているのはココロです。もちろん聞く人もココロで聞いてくれはります。これは生きていく上で必須の心構え！　この質問のお陰で、私の方が忘れかけてたことに気づかされたよ、ありがとう！

（ジャズシンガー）

小出　健太郎さん

19歳　大阪府

お調子者の野球部員の男子の言動が、なんかわからんけど腹が立つ――男子がうるさいという女子高生の悩みに対し、それは、「男子がすでにあなたの心を騒がしはじめよった証拠や、恋心が始動したということ！」と回答する綾戸さん。そして、「胸のあたりがモヤモヤ、ザワザワするのも大事な成長で、これからの様々な経験を、常に自分の心を感じ取りながら経験してください」と励ましています。過ぎ去った自分の青春を思い出し、なんだか懐かしい気持ちになりました。

中学、高校を通して、自分は恥ずかしくてこんなふうに女子にちょっかいをだしたことはありませんでしたが、周囲にはこういう男子はいっぱいいたなぁと思います。自分は大学で教職課程をとっており、もし自分が将来、先生になって担任のクラスを持ったら、こんなふうに男子と女子のやりとりが見られるんかなぁ、と少し楽しみになりました。そして「先生、男子がなんか腹たつわ」なんて相談されたら、綾戸さんみたいに答えたいなぁと思いました。

毎日新聞　2016年1月25日付朝刊を読んで

大学奨励賞

茨城県	茨城キリスト教大学
茨城県	流通経済大学流通情報学部・永岡ゼミ
埼玉県	マグネットプレス(早稲田大学)
東京都	慶應塾生新聞会
東京都	スポーツ法政新聞会
東京都	成蹊大学新聞会
東京都	帝京スポーツ新聞部
東京都	東洋大学スポーツ新聞編集部
東京都	明大スポーツ新聞部
神奈川県	文教大学・本浜ゼミ
千葉県	江戸川大学マスコミ学科広告広報コース
千葉県	千葉経済大学・中嶌ゼミ
大阪府	近畿大学・金井啓子研究室
大阪府	UNN 関西学生報道連盟
兵庫県	流通科学大学
岡山県	川崎医療短期大学
岡山県	川崎医療福祉大学
広島県	広島文教女子大学・岩下ゼミ

HAPPY NEWS 学校賞

青森県	八戸市立是川中学校
愛知県	名古屋国際中学校
岡山県	朝日塾中等教育学校
熊本県	熊本電子ビジネス専門学校
熊本県	専修学校熊本YMCA学院
宮崎県	宮崎ビジネス公務員専門学校
鹿児島県	鹿児島レディスカレッジ

家族奨励賞

栃木県	酒井さん親子と祖母(母・由起さん、姉・珠寿さん、妹・琉寿さん、祖母・手塚光子さん)
栃木県	中野さん親子(母・寿江さん、娘・幸さん)
静岡県	菅沼さん親子(母・亜矢子さん、兄・凛太朗さん、妹・美玖さん)
静岡県	松下さん親子(母・直美さん、娘・京瑚さん)
岐阜県	松岡さん親子(父・裕二さん、母・里美さん、兄・康太さん、弟・学さん)
山口県	赤崎さん親子(母・広子さん、息子・功太郎さん)
徳島県	市原さん親子(母・美佳さん、娘・佳子さん)
高知県	久保田さん親子(母・美紀さん、姉・美優さん、弟・聖那さん)

HAPPY NEWS大学生大賞(グループ)

HAPPY NEWS 2015の大学生大賞(グループ)は、多数の応募の中から審査した結果、花園大学(京都市)教職課程の皆さんが選ばれました。

贈賞式は2月25日、同大の会議室で行われ、指導にあたった中善則文学部准教授や石田斉事務局長のほか、教職員や学生ら約30人が出席しました。京都新聞社の速水輝彦・取締役経営管理担当から、石田事務局長に表彰状と目録が贈られました。

【中善則准教授のコメント】

新聞を読む学生を育てたいと思い、授業で新聞に親しんでもらっています。ネットが流行する中、新聞ほど確かな情報源はありません。学生たちには、授業で新聞を使う教師になって、「新聞を読むのが楽しい」という子どもたちを育ててほしいです。

【小出健太郎さん(大学生大賞〈個人〉受賞者)のコメント】

女子高生が同級生の男子にちょっかいをかけられ、腹を立てているという人生相談の記事を選びました(8ページ参照)。ちょっかいの理由を「恋」と分析し「いろんな気持ちを感じることを大切にして」というメッセージに温かい気持ちになりました。嫌なニュースだけでなく、ほほえましいニュースも読めるのが新聞の良さだと思います。

HAPPY NEWS 家族賞

青森県	竹田さん親子(母・美由紀さん、息子・勇真さん)
愛知県	水谷さん親子(母・直代さん、息子・英祐さん)
京都府	杉田さんきょうだい(兄・岳さん、妹・渚さん)
大分県	黒岩さん親子(父・章さん、娘・怜奈さん)

ハッピースクラップ帳を試してみませんか

台紙にお気に入りの写真やシールなどを貼り、きれいに飾りつける「スクラップブッキング」。これを、新聞記事で試してみませんか。すてきな記事や写真、広告などを貼りつけて誰かにプレゼントすれば、喜ばれるかも。また、学校や職場などでワークショップを開いてみれば、気軽に新聞に親しめます。

新聞協会は、ゲスト審査員の森本千絵さんのデザインによる台紙やシールなどをひとつにまとめた「ハッピースクラップ帳」キットを作成しました。新聞協会のウェブサイト「よんどく!」からPDF版がダウンロードできます。また、より多くの皆さんに楽しんでいただけるよう、新しいデザインも追加していきます。活用例なども含め、「よんどく!」で随時お知らせしますので、ぜひのぞいてみてください。

HAPPY NEWS 2016 募集要項

想像もしていなかった出合いやきっかけを与えてくれた記事、あなたをHAPPYな気持ちにしてくれた記事に、コメントを添えてお送りください。キラリと光るコメントをお寄せいただいた方には、賞をお贈りします。大学生や家族などグループの取り組みも大歓迎!

【応募要領】
▽読んだ紙面の掲載日、掲載紙名、朝・夕刊の別▽コメント(200字から400字程度)▽郵便番号▽住所▽氏名▽年齢▽性別▽職業▽電話番号を書いてご応募ください。新聞紙面は、「紙面の切り抜きを同封して郵送」「紙面を撮影した写真をコメントに添付して送る」のいずれかの方法でお知らせください。

【応募対象と締め切り】
2016年3月1日～2017年2月5日の新聞に掲載された記事や写真、広告。応募締め切りは2017年2月6日(月)。※必着　※2017年2月6日～28日の紙面をもとにした作品は、2月中も応募を受け付けます。

【応募方法】郵送、メール、インターネット

◆大学生のみなさん○大学生の作品は、一般部門と大学生大賞(個人)の対象として審査します。○ゼミやサークルなどグループ(2人以上)で応募した場合、作品は一般部門、大学生大賞(個人)の両方で審査され、応募したグループは、大学生大賞(グループ)の審査対象となります。○大学名・学年、グループ応募の場合はグループ名をお知らせください。

◆小中高校生のみなさん○親子やきょうだいなど、家族で取り組んでください。○記事は同じものでも、家族それぞれ別のものでも、どちらでも結構です。○家族応募の場合は必ず、作品を同じ封筒にまとめてお送りください。○小中高校生個人での応募は受け付けていません。「いっしょに読もう!新聞コンクール」にご応募ください。締め切りは9月9日(金)必着。詳細はhttp://nie.jp/参照

【賞および賞金】
日本新聞協会ならびにゲスト審査員が応募された紙面とコメントを審査し、次の各賞を贈賞します。
▽「HAPPY NEWS大賞」現金30万円:1件 ▽「HAPPY NEWS賞2016」現金2万円:10件程度 ▽「大学生大賞」(個人)現金10万円:3件 ▽「大学生大賞」(グループ)現金30万円:1件 ▽「ゲスト審査員賞」現金5万円:数件 ▽「家族賞」現金2万円:数件
16年度はゲスト審査員に山本昌さん(元中日ドラゴンズ)が加わります。また、HAPPY NEWSを象徴する「HAPPY NEWS PERSON」を選びます。結果は、2017年4月上旬の新聞紙面、日本新聞協会ウェブサイト、「新聞をヨム日」関連の配布物にて発表します。※選ばれたコメントは、新聞をPRする各種制作物、ウェブサイトおよびイベントなどに使用します。発表に際し、趣旨を損なわない程度にコメントの一部を修正することがあります。※応募作品は返却しません。※いただいた個人情報は、当キャンペーン以外の用途には使用しません。

【応募・問い合わせ先】〒100-8543 東京都千代田区内幸町2ー2ー1日本新聞協会「HAPPY NEWS」係 電話 03(3591)4637 メール happynews0406@pressnet.or.jp
インターネットでのご応募は、日本新聞協会の新聞PRウェブサイト「よんどく!」から。http://www.yondoku.com

第6回いっしょに読もう！新聞コンクール 結果発表

「いっしょに読もう！新聞コンクール」は、新聞協会が学校などで新聞を教材として活用する「NIE（Newspaper in Education＝「エヌ・アイ・イー」、教育に新聞を）」の一環として実施しています。2015年度の第6回は、全国47都道府県から合計3万988一編（小学生6522編、中学生一万9028編、高校・高等専門学校生一万433一編）の応募がありました。

コンクールは、①新聞記事を選んだ理由や自分の意見・感想、②家族や友だちに自分が選んだ記事を読んでもらい、その人の意見や記事について話し合った内容、③話し合った後の自分の意見・感想・提言など――の3点を応募するものです。自分一人の感想・意見の表明だけではなく、周囲の人の意見も聞いて、児童・生徒により深く考える機会を提供することがねらいです。

同コンクールに設けたHAPPY NEWS賞の作品と最優秀賞の概要、上位入選者は次のとおりです。

HAPPY NEWS賞を受賞した三浦友愛さん（写真右）と河北新報社の跡部裕史・会津若松支局長

その他の詳細は、新聞協会NIEウェブサイト（http://nie.jp）をご覧ください。※学校名・学年、肩書き等は、受賞当時のものです。

HAPPY NEWS賞

原発避難者の手業 欧州に

会津の民芸品 博物館展示や販売

東京電力福島第1原発事故で避難生活を送る福島県の人々が作る人形や布草履が、欧州で注目されている。いずれも避難先の会津地方の伝統を生かした民芸品で、手作りのぬくもりとともに、原発事故や復興への思いを伝えている。

◇

会津若松市に避難する大熊町の人々が絵付けをする「おおちゃん小法師」は9月末まで、イタリア・ザガローロ市の玩具博物館で開かれている「起き上がり小法師展」に並ぶ。

同展は、会津地方の郷土玩具の起き上がり小法師を復興のシンボルにしようと、ファッションデザイナー高田暁三さんが進めるプロジェクトの一環。俳優のアラン・ドロンさんら著名人が絵付けした小法師とともに、おおちゃん小法師も飾られている。

おおちゃん小法師は町に義援金を贈った人に感謝の気持ちを伝えるため、町が制作。町のキャラクター「おおちゃん」をモデルに女子中学生がデザインした。町は商品化を検討し、5日にある埼玉県三芳町のイベントで試験販売する予定。

担当する町企画調整課の佐久間秀幸さん（34）は「小法師を通じ、大熊をはじめ福島は復興に向けて頑張っているというメッセージを伝えたい」と話す。

楢葉町から避難し、会津美里町の仮設住宅で暮らす8人でつくる「わらじ組」は布草履を手掛ける。東京のアパートでの販売をきっかけに、イタリアのブランド「マルニ」から同社の布を使った草履を作ってほしいと依頼があった。4月にパリの店舗で販売し、約130足を完売した。

布草履作りは、見知らぬ同士の仮設住宅で交流の場をつくろうと、地元のNPOの働き掛けで始まった。材料は救援物資の衣類で、会津地方に伝わるわら草履の制作技術を応用する。

カラフルな色の組み合わせが特徴で、メンバーの小尾トミ子さん（62）は「着こなした服の布を使うので履き心地が優しい」と言う。

楢葉町は5日に避難指示が解除される予定で、メンバーはゆくゆくは帰還する考えだ。小尾さんは「楢葉に戻っても仲良く、長く続けたい」と話す。

復興への思い伝える

▲大熊町民「おおちゃん小法師」

会津若松市で暮らす大熊町民が絵付けをする「おおちゃん小法師」。笑顔のクマが町特産のナシとサケを持つ

楢葉町民「布草履」▼

会津美里町に避難した楢葉町の人々が作る布草履。色合いに作り手の個性が表れるという

三浦 友愛 さん
高知県・香美市立山田小学校4年

意見を聞いた人：母
用いた記事：「原発避難者の手業 欧州に」河北新報 2015年9月3日付朝刊

①この記事を選んだ理由と、記事を読んで思ったこと、考えたことを書いてください

私がこの記事を選んだ理由は、記事を読み、おおちゃん小法師と布草履の写真を見たときに、人のぬくもりと復興に向けての福島県の人々の生きる力を強く感じたからです。4年半前の東日本大震災で家族や家など大切なものを一瞬で失い、悲しみに包まれたと思います。けれど、多くの人に精神面でも支援してもらい、やっと立ち上がることができたことの感謝の気持ちを込めて民芸品を作り、世界に発信しようとしたことはすばらしく、うれしくなりました。

②家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください

母は「東日本大震災から4年半過ぎたけれど、まだまだ復興には多くの時間と人手が必要だと思う。一人の力は小さいけれど、互いに励まし合い両手をつなぎ合わせていくことで、復興への強固な土台を築いていくことができる。七転び八起きの精神で頑張る東北の人たちのことを胸に留め、自分の持てる力を託すことが大事」と言いました。

③話し合った後のあなたの意見や提案・提言を書いてください

夏休みに広島の原爆の子の像を見に行ったときに、千羽鶴で平和をモチーフにした絵を見ました。その絵は千羽鶴一羽一羽に平和を願う気持ちが込められ、明るく大きい太陽に向かって手を差しのべ、ハートを中心に人と人との手で支え合いつながり、その下に大きい平和な地球が保たれている作品でした。母が用意してくれた河北新報の題字の下には、「再生へ心ひとつに」とあり、私は広島と福島は遠く離れているけれど、原爆や大震災から復興しようとする思いは一緒なんだと思いました。そして、おおちゃん小法師は何度倒れても何度でも立ち上がっていく強い心を表し、布草履は支援物資で届いた心のこもった衣類を再利用して作られ、力強く立ち上がる両足を温かく包む草履へと再生されました。私は河北新報を読み復興に向けて頑張る福島の人の気持ちがよく分かったので、遠い高知から心は近くに「一緒に頑張ろう東北の人へ！高知より」と力一杯応援したいです。

【授賞理由】東京電力福島第1原子力発電所の事故で避難生活を送る福島県の人々が作る民芸品が、欧州で注目されています。原発事故や東日本大震災からの復興に向けた人々の思いを取り上げた記事を、被災地から遠く離れた高知県に住む三浦さんが見つけました。

日ごろ読むことのない東北の地方紙に載った、復興への人々の思い。三浦さんは、記事と夏休みに訪れた広島での経験とを重ね合わせ、遠く離れた地域でも復興への思いは変わらないと気付きます。お母さんと話し合い、「遠い高知から心は近くに『一緒に頑張ろう』と応援したい」とつづりました。

記事から福島の人々に思いをはせるにとどまらず、実際に訪れた広島で学んだことを結びつけ、考えを深めています。お母さんの言葉を踏まえた小学生らしい素直な感想からは、家族といっしょに新聞に親しんでいる様子がうかがわれ、HAPPY NEWS賞にふさわしいと評価されました。

新聞協会の大西弘美博物館・NIE委員会委員長(写真2列目中央)を囲み、受賞者らが記念撮影

小学生部門 最優秀賞

瀬底　蘭さん

沖縄県・北中城村立北中城小学校6年

意見を聞いた人：母
用いた記事：「国策　民意を侵害」沖縄タイムス 2015年1月16日付朝刊

米軍基地をめぐって同じ沖縄県民の警官と市民が、敵味方のように向き合う現状を描いた記事を目にし、お母さんは涙を流しました。それは、県民間の複雑な感情を察したからではなく、記事の文末の「警察官は目頭をこすって空を見上げた」に深い感動を覚えたからでした。瀬底さんはそこから、新聞は出来事をただ伝えるだけではなく、人の心を救う力があることに気付きます。NIEの醍醐味を感じさせるものとして、最優秀賞に選ばれました。

中学生部門 最優秀賞

川井　里紗さん

岡山県・清心中学校・清心女子高等学校中学1年

意見を聞いた人：父
用いた記事：「『こくさいこどもフォーラム岡山』高校生懸賞論文 最優秀賞『感謝の心で』」山陽新聞 2015年7月27日付朝刊

川井さんは高校生懸賞論文の最優秀作を新聞で読みました。困難に負けず、今まで育ててくれた人たちへ感謝の心を持ち続けながら成長している受賞者の姿に、深く心を打たれます。父親と話し合う中で川井さんは自ら、世界の恵まれない子供を支援する団体やプロジェクトを調べ、ゆくゆくは参加してみたいという気持ちを持つに至りました。記事がきっかけとなり、行動へと進んでいった点が高く評価されました。

高校生部門 最優秀賞

中野　望愛さん

福岡県・西南女学院中学校・高等学校高校1年

意見を聞いた人：父
用いた記事：「安保法案　読者の声」西日本新聞 2015年6月11日付朝刊

中野さんは、安全保障関連法案に対する読者の多様な声を取り上げた記事を選びました。同法には反対との意見を持つ中野さんですが、父親の意見を聞き、自分と異なる見解にも一理あると考えるようになります。記事を読んで自身の考えを深めるとともに、異なる意見にも耳を傾けながら、自らの意見を明確に主張した点が評価されました。

優秀賞

(小学生)		
東京都	北区立東十条小学校3年	北村　ひなたさん
長野県	才教学園小学校4年	河西　俊太朗さん
愛知県	一宮市立神山小学校6年	塚原　麻友さん
岐阜県	大垣市立興文小学校6年	松井　博雅さん
富山県	高岡市立西条小学校4年	北山　陽彩さん
富山県	砺波市立砺波東部小学校4年	中山　慧羽さん
福井県	福井市宝永小学校5年	池田　皓さん
京都府	京都市立葵小学校6年	後藤　優斉さん
鳥取県	鳥取市立散岐小学校2年	西尾　衛さん
福岡県	宗像市立赤間小学校3年	永露　瑶季さん
(中学生)		
群馬県	太田市立西中学校3年	金子　遥香さん
埼玉県	さいたま市立植竹中学校2年	松岡　夏希さん
東京都	十文字中学・高等学校中学3年	天野　華子さん
東京都	明治大学付属明治中学校2年	野本　布美さん
新潟県	新潟大学教育学部附属新潟中学校1年	若井　知佳さん
徳島県	鳴門教育大学附属中学校2年	横山　心優さん
徳島県	鳴門教育大学附属中学校3年	川原　さくらさん
高知県	高知市立大津中学校3年	谷　乃愛さん
熊本県	熊本市立白川中学校1年	窪田　絢水さん
鹿児島県	鹿児島純心女子中学・高等学校中学3年	新納　莉子さん
(高校生)		
青森県	青森県立八戸西高等学校1年	芹沢　怜桜羽さん
東京都	白百合学園中学高等学校高校2年	日山　絢子さん
神奈川県	神奈川県立川和高等学校1年	五十嵐　薫さん
神奈川県	神奈川県立川和高等学校2年	土谷　優衣さん
愛知県	椙山女学園高等学校2年	加藤　真子さん
愛知県	椙山女学園高等学校2年	水谷　舞依さん
大阪府	関西創価高等学校2年	緋田　舞美さん
大阪府	大阪府立春日丘高等学校1年	雑賀　亜以子さん
岡山県	岡山県立岡山南高等学校3年	渡部　真子さん
福岡県	福岡県立朝倉高等学校1年	藤井　奈那さん

優秀学校賞

(小学校)	
秋田県	由利本荘市立上川大内小学校
東京都	北区立東十条小学校
福井県	福井市松本小学校
和歌山県	和歌山市立四箇郷北小学校
沖縄県	南城市立大里南小学校
(中学校)	
秋田県	由利本荘市立由利中学校
茨城県	常陸太田市立里美中学校
岡山県	清心中学校・清心女子高等学校
徳島県	鳴門教育大学附属中学校
福岡県	筑紫野市立筑紫野南中学校
(高校)	
埼玉県	埼玉県立羽生第一高等学校
岐阜県	岐阜県立大垣桜高等学校
兵庫県	兵庫県立武庫荘総合高等学校
福岡県	西南女学院高等学校
熊本県	熊本県立大津高等学校

HAPPY NEWS 2015

ゲスト審査員賞

小山薫堂賞

和田 美穂さん
36歳 長野県

「おかえり」という言葉が私は好きだ。それを思い出せたのは、この記事を見て心が温かくなったからだ。 高校の帰り道は、長い上り坂だった。自転車に乗り、顔を真っ赤にした私に、途中で農作業中の見知らぬおじさんが声をかけてくれた。

「おかえり」。たった一言なのに、私の疲れを一気にとってくれた、ものすごいパワーのある言葉だった。子どもたちの登下校を長年見守り、支え、支えられ、最初は「見知らぬおじさん」だったのが、「じゅんちゃん」と親しまれるようにまでなった、荒井さんの活躍に感動した。

人は、誰かを支え、誰かに支えられて生きている、と私は強く思う。

現在、介護福祉士として介護の現場で働いている私は、人生の大先輩たちからの笑顔とありがとうの言葉で、元気とパワーをもらいながら生かされ、小学一年生の息子に「おかえり」と声をかけている。

信濃毎日新聞 2015年12月1日付朝刊を読んで

朝、新聞を開き、ひとつの記事を見つける。それがきっかけとなり、自分の過去や現在を思い、それが明日を生きる活力へとつながる…そんな新聞の「魅力」を、このエッセーから感じました。

小山薫堂（放送作家・脚本家）

上田 「じゅんちゃん 11年ありがとう」

児童の登下校見守った荒井さん 引退

上田市西小学校（常磐城5）児童の登下校を見守る「西小児童みまもり隊」を約11年間続けた荒井潤さん（86）＝上田市＝が30日、校門の前で最後の活動をした。高齢や病気を患ったため続けられなくなり引退を決めた。児童たちは手紙を渡したり握手をしたりして別れを惜しんだ。

荒井さんは元県蚕糸学捜査研究所長で、現在は県写真漕艇協会理事を務める。西小のすぐ近くに住み、みまもり隊が発足した2005年2月に入隊。朝は校門前の横断歩道に立ち、下校時は低学年の下校グループに付き添って最後の1人の家まで一緒に歩く。児童から「じゅんちゃん」と親しまれ、09年に結がんの手術を受けた時も1カ月で復帰した。約2週間の入院中、児童のリコーダー演奏を録音したテープや手紙が届いた。

この日、荒井さんは「今日でさようならみんな元気でね！」と書いた札を首から下げて立った。11月26日の全校集会で引退を聞いていた児童たちは、荒井さんに駆け寄り「さみしいよ」。「ありがとうございました」と言う児童や、抱きついて「また遊んでね」とせがむ児童もいた。

1年生は学級ごとにメッセージを貼ったパネルを、2年生は手紙をまとめた冊子を贈った。台湾出身の6年嚴日辰君（10）は「1年生の時、優しく日本語を教えてもらった」。最後の見守りを終えた荒井さんは「脱力感があるが、満足感もいっぱい。幸せな時間だった」と話した。

別れを惜しむ児童と話す荒井さん（左）

森本千絵賞

中田 由美子さん
59歳 山梨県

「天国」？「ブンメイさま」？

思い出しました。それは物をたくさん手に入れることが幸せである、と手放しで信じていた当時の私に、文明というものの正体を示してくれたマンガでした。そして文明のもたらす便利さに疑いの目を向けさせてくれるものでもありました。

ところが今や、身の周りは物であふれ、忘れっぽい私はいつか「ブンメイさま」の魔力にまひしてしまっていたのでした。水木先生の、どんな問いにもぶれない力のある言葉は、何となく怖いけれど正直で憎めない妖怪たちとの会話の中で醸し出されてきたものだったのだと思われました。「幸せのコツは自分に合うところを見極めることか」。分かりやすく、それゆえに忘れやすいことなのかもしれません。

山梨日日新聞 2016年1月20日付朝刊を読んで

水木サンちのきょーいく論

水木 悦子（10）

父の幸福論

子どものころのことだ。大衆楽の生活ぶりを特集したテレビ番組を、家族で見ていた。

「お金がたくさんあれば、ああいう暮らしができるんだね。いいなぁ、幸せそうで」

と言うと、父（水木しげる）は、

「金がようけあるからといって、必ずしも幸せとは限らんと思うね。大金があると、とられまいと守る必要が出て心配事が増えるし、物を買えば部屋が狭くなる。結局、苦しいだけだ」

そう言って、仕事に戻っていった。

父が出征した戦地ニューギニアでは、当時から小さな貨幣をつなげて作ったお金があり、今でも買い物ができる。私が父と旅行した時も、10円の大きさならバナナ1本が買えた。父によると、それがなくても、物々交換ができると、父は言っていた。

父はこの人々の素朴な暮らしぶりが大好きになり、終戦時、すぐに帰国せず現地除隊を申し出るほどだった。彼らの温かい人柄に加え「お金がなくても幸せ」という価値観も魅力だったらしい。

「天国」という父の短編がある。

時は原始時代、人々は物が少ないながら、のんびり暮らしていた。ある男が狩りの途中、巨大生物を村に連れて帰る。それは、硬い土を与えると、生活に必要な物を提供してくれる「ブンメイ（文明）さま」だった。それまでのんきに暮らしていた人々は、土を掘り出してはこの生物に与え始めた。物は増えたが、土掘りの労働は楽ではない。それは本当に幸せなのだろうか、というストーリーだ。

「お父ちゃんは100万円あったら過ぎるけど、1千万円欲しいと思ったら、寝るヒマはない。たくさんお金があっても、それを楽しむ時間と健康がなければ意味がない。そう言っていた。

「この大福も、二つまでおいしく食えても、三つは食べられんからネ」

幸せのコツは、自分に合うところを見極めることか。…うーむ、なるほど。（水木しげる次女）

＝第3水曜日に掲載します

水木しげる漫画大全集「天国」より（©水木プロ）

なんのために働くのか、稼ぐのか。そこに幸せはあるのか。稼いでもそれを楽しむ健康と時間がなければ意味がない。幸せのコツは、自分にあうところを見極めること。水木しげるさんによる幸福論、それをハッピーニュースとして見いだした気持ちに拍手したい。 森本千絵（アートディレクター）

miwa賞

山川 直壮さん
57歳 沖縄県

学生服姿の生徒全員がサングラス。当初、目立ちたがりの高校生特有のパフォーマンスかと思ったが、記事を読み進むうちに、早とちりをした自分が恥ずかしくなった。

子宮頸がんワクチンの副反応による健康被害で、サングラスが手放せない女子生徒が皆と校内合唱祭に参加できるようにと、思いやりの気持ちから、彼らが発案した演出だったのだ。国内外で憂うつになるニュースが氾濫し、ややもすると人間不信に陥りそうになる中で、この心温まる記事に触れることができ、「まだまだ世の中捨てたものじゃない」と、この子たちに救われた思いがする。

生徒たちの心意気に応えた担任の女性教師も素晴らしいし、くだんの女子生徒からは、ワクチン接種によって起こる多くの課題についての問題提起も忘れない。早期に治療法が確立され、県立宮古高校3年5組の生徒みんなと一緒に卒業できることを、心から願わずにはいられない。

沖縄タイムス 2015年10月23日付朝刊を読んで

サングラスを着用し「15の夜」を歌う3年5組の生徒＝9月25日、宮古島市・マティダ市民劇場（宮古高校提供）

サングラス姿 歌声一つ

子宮頸がんワクチン副反応の友と

宮古高校3年5組 「高校一番の思い出」

【宮古島】先月初旬、県立宮古高校（本村博之校長）の校内合唱祭に登場した3年5組の生徒36人の姿に、どよめきが起こった。全員がサングラスをかけていたからだ。子宮頸がんワクチンの副反応とみられる健康被害で光に弱く、サングラスが手放せない女子生徒（18）のためにクラスメートが発案。一人じゃないよ」「思い出つくろう」と書く歌声に全員が思いを込めた。（新垣亮）

ワクチン接種が原因とみられる健康被害は全国各地で10代を中心に相次ぐ。女子生徒は中2の時に接種。高校に入ると、しびれやいれん、睡眠障害、全身の痛みなどに苦しめられた。体調不良や通院などで登校できず、学校に行っても保健室にいることもあり、なかなか教室で会えない女子生徒をクラスメートは気に掛けていた。

夏休みに合唱練習を始めたころ、女子生徒が担任の島田有希教諭に「サングラスがないと出られない」と、参加を躊躇する相談をしていた姿を見たクラスメートの機部史絵さん（18）が「高校生活最後の一大行事。みんなで参加したい。全員でサングラスをかけよう」と切り出した。

市内のマティダ市民劇場で開かれた合唱祭でクラスが歌ったのは竜崎義さんの「15の夜」。指揮の砂川大河さん（17）は「みんな楽しそうに笑みを浮かべていてうれしかった」。他のメンバーも「高校生活一番の思い出ができた」と口をそろえる。

クラスメートの提案に女子生徒は「うれしかったがサングラスをみんなでそろえるのは大変。悪いな、という気持ちもあった」。だが合唱後、握手を求めてきた男子生徒に「クラスが一つになれた。ありがとね」と声をかけられ、込み上げてくるものがあったという。

健康被害が全国的に相次ぎ、経験的鎮痛や治療法の未確立など、多くの課題を目の当たりにしてきた女子生徒は「早く治してみんなと一緒に卒業したい」と言う。「自分より重い症状の子もたくさんいる。もっとこの問題をなくみんなに知ってほしい」

この記事を私も読んでいました。今年はＮＨＫ全国学校音楽コンクールの課題曲（中学校の部）を担当させていただいているので、印象に残っていました。私も中学の校内合唱コンクールに毎年、気合いを入れて臨み、クラスの子たちと練習した日々は今でも大切な思い出です。クラスみんなで参加できるようにという、思いやりの気持ちから生まれたアイデアに心を打たれました。この思い出がきっとこの先、色々な場面で彼女の心を救ってくれるのではないでしょうか。彼女と同じ症状に苦しむ人たちのためにも、治療法が見つかり早く治ることを祈っています。

miwa（シンガー・ソングライター）

日本の新聞・通信社 日本新聞協会加盟の新聞・通信社です。当協会ウェブサイト（http://www.pressnet.or.jp/）から各社のサイトにアクセスできます。
● 東京地方 / 朝日新聞東京本社 / 毎日新聞東京本社 / 読売新聞東京本社 / 日本経済新聞社 / 東京新聞 / 産経新聞東京本社 / サンケイスポーツ / 夕刊フジ / ジャパンタイムズ / 報知新聞社 日刊工業新聞社 / 日刊スポーツ新聞社 / 日本工業新聞社 / スポーツニッポン新聞社 / 東京スポーツ新聞社 / 電波新聞社 / 日本海事新聞社 / 水産経済新聞社 / 東京ニュース通信社 / 日本農業新聞 共同通信社 / 時事通信社 / エヌピー通信社 ● 大阪地方 / 朝日新聞大阪本社 / 毎日新聞大阪本社 / 読売新聞大阪本社 / 日本経済新聞大阪本社 / 産経新聞大阪本社 / 日刊スポーツ新聞西日本 ● 北海道地方 / 北海道新聞社 / 室蘭民報社 / 十勝毎日新聞社 / 釧路新聞社 / 苫小牧民報社 / 函館新聞社 / 北海道日刊スポーツ新聞社 / 道新スポーツ ● 東北地方 / 東奥日報社 / 陸奥新報社 デーリー東北新聞社 / 岩手日報社 / 岩手日日新聞社 / 河北新報社 / 秋田魁新報社 / 北羽新報社 / 山形新聞社 / 荘内日報社 / 米澤新聞社 / 福島民報社 / 福島民友新聞社 / いわき民報社 ● 関東地方 / 茨城新聞社 / 下野新聞社 / 上毛新聞社 / 桐生タイムス社 / 埼玉新聞社 / 神奈川新聞社 / 千葉日報社 ● 中部地方 / 山梨日日新聞社 / 静岡新聞社 / 信濃毎日新聞社 / 長野日報社 南信州新聞社 / 市民タイムス / 中日新聞社 / 中部経済新聞社 / 岐阜新聞社 ● 北陸地方 / 新潟日報社 / 北日本新聞社 / 北國新聞社 / 中日新聞北陸本社 / 福井新聞社 / 日刊県民福井 ● 近畿地方 伊勢新聞社 / 夕刊三重新聞社 / 京都新聞社 / 神戸新聞社 / 奈良新聞社 / 紀伊民報社 / 熊野新聞社 ● 中国地方 / 山陽新聞社 / 中国新聞社 / 新日本海新聞社 / 山陰中央新報社 / 島根日新聞社 山口新聞社 / 宇部日報社 ● 四国地方 / 徳島新聞社 / 四国新聞社 / 愛媛新聞社 / 高知新聞社 ● 九州地方 / 西日本新聞社 / 朝日新聞西部本社 / 毎日新聞西部本社 / 読売新聞西部本社 佐賀新聞社 / 長崎新聞社 / 熊本日日新聞社 / 大分合同新聞社 / 宮崎日日新聞社 / 夕刊デイリー新聞社 / 南日本新聞社 / 南海日日新聞社 / 沖縄タイムス社 / 琉球新報社 / 八重山毎日新聞 / 宮古毎日新聞社

発行 一般社団法人 日本新聞協会
〒100-8543
東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル7階
電話 ： 03-3591-4637
http://www.yondoku.com